

松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】惠羅 さとみ

【所属】(助成決定時)一橋大学大学院社会学研究科

【研究題目】移民労働者を包摂する新たなアメリカ労働運動
—地域コミュニティの多元性と組織間相互連関に着目して

【研究の目的】

本研究は、産業空洞化・非正規雇用の拡大・大量移民の流入という近年の変容を背景に、1995年以降のナショナルセンターの政策転換を契機として歴史的転換期に直面しているアメリカ労働運動を対象に、多様なエスニシティを持つ移民組織化のあり方を実態的に解明することを目的とした。具体的には、「非合法」移民労働者を多く含む日雇い労働市場をめぐる運動に焦点を当て、第一に、新たな「社会運動ユニオニズム」が直面している諸課題を労働組合運動の内部的変容から明らかにすること、第二に、労働組合運動の外側で活発化しつつある、地域コミュニティを基盤とした草の根レベルからの移民組織化の運動の進展メカニズムを解明すること、第三に労働運動の全国的な進展の中での、組合型および非組合型運動の双方における、組織的な相互連関のあり方を明らかにすることである。

【研究の内容・方法】

研究方法は、労働組合・移民支援組織・地域コミュニティ組織などの多様な運動主体に対する実態調査とし、新旧の労働運動・社会運動をめぐるローカルな文脈に着目しながら地域間比較分析を行った。まず先行研究に関しては、主に「社会運動ユニオニズム」に関する文献収集・整理を行い、地域コミュニティを基盤とした新たな労働運動・社会運動の発展経緯や背景となる特定都市の政治文脈について理解した。特に、市民権運動やリビングウェッジ運動などの、地域ごとに蓄積されてきた運動ネットワークに着目した。実態調査に関しては、2008年3月1日～18日の日程で、ロサンゼルス、サンディエゴ、ニューヨーク、マイアミの4都市において、移民関連組織・労組オルガナイザーおよび研究者等計10名に対して個別インタビューを実施するとともに、移民・労働運動に関連するミーティングに計3回出席し参与観察を行った。調査から明らかになった点は、第一に、ロサンゼルスで活性化しているワーカーセンターの取り組みがサンディエゴなどの他の西海岸都市においても浸透し、個人オルガナイザー、法律専門組織、教会などがベースとなって、日雇い移民労働者の草の根の組織化が自律的に進み始めていること、第二に、ニューヨークなどの保守的な労組が強い地域においても、LIUNAなどの特定の職種別労働組合が主導となって、コミュニティ組織との連携した組織化プログラムが新設されるようになっていること、第三に、それらの取り組みの背景には、これまでの移民運動の発展や全国ネットワーク、労組ナショナルセンターAFL-CIOによるトップレベルの戦略転換があること等である。また、フィールド調査において参加した諸会合は、個別の移民支援組織間ネットワークによるもの、特定のエスニックを中心とする労働組合オルガナイザーによるもの、地域組織と労働組合の合同で実施されたものなど、様々な形態を取っており、多様なエスニック・組織間をまたぐような運動の進展プロセスを実態的に理解することができた。

【結論・考察】

今回の調査研究を通じて、第一に、保守的であるとされるアメリカ建設労組が、移民組織化を見据えたローカルな取り組みを始めていること、その過程で、移民出身のオルガナイザーが重要な役割を担うようになっていることが明らかとなった。第二に、地域コミュニティを基盤とする移民運動・社会運動は、地域ごとの固有の機会構造に規制されながらも、不況下においても継続的に不安定な移民労働者の草の根からの組織化に取り組み続けており、横断的なネットワークを構築しつつあることを発見した。第三に、これらの双方向的な運動の発展過程では、既存の労働運動の枠組みと、新たなエスニック紐帯を基盤としたネットワークが相互浸透しつつあり、様々な共通利害の

調整を行っていること、また運動の進展プロセスを通して、新たな移民出身のオルガナイザーや第2世代の経験が重要な意味を持つようになっていくとともに、既存の労働組合運動の中で蓄積された経験との接点を探りつつあることが注目される。これらのことから、今後の研究を進める上でも、トランスナショナルな移動経験、機会構造としてのローカリティー、世代経験といった視覚を導入していくことが重要であると考えられる。